1

法学部 やる気応援奨学金 Report Vol.134

法学部独自の奨学金制度
「やる気応援奨学金」を利用した
学生の体験をご紹介します

和解への道のり

有馬 千裕（ありま ちひろ）
法学部法律学科3年
神奈川県立湘南高校出身

なぜ私が南アフリカに!?

やる気応援奨学金をいただき、2018年の春、5週間南アフリカに。今回が人生初の留学で、なぜ私がこの国に立っているのか。そのきっかけは授業で扱った「真実和解委員会」にあった。アパルトヘイト（人種隔離政策）後の南アフリカにおいて重大なキーワードとなる「真実」と「和解」。この二つのワードが、高校3年時に人間関係に悩み、解決策を見出せないままでいた私に衝撃を与えた。自分のやりたかったことはこれだと気づいた。とりわけ勝者、敗者を生み出さない、学びあう場としての「和解」がひどく印象に残ったのである。

紛争はいつ終わる?

紛争における私の関心は「いつ紛争は終わるのか?」にあった。紛争のなかで友を失い、子を失った個人は、その悲しみも相手への憎みも個人の問題として片づけられる。しかしその個人にいったい何ができるのか、その傷は誰が癒してくれるのか、と。

南アフリカで長く続いたアパルトヘイトは国民の間に断絶を生み、格差や対立感情をもたらした。その後、人々が再び同じ一国民として共存していくうえで、傷ついた心と憎しみを癒すことは南アフリカの課題であった。こうしたなかで生まれたのが真実和解委員会である。彼らの任務は隠され続けた真実を解明し、個人間の和解を促すことにあった。

しかし被害者の再トラウマ化や加害者の命の危険もあるなか、不可視で万里の道である和解の意義をどのように導き出せるのだろうか。こうした興味が私を南アフリカへと導いたのであった。

学び

4週間の語学学校が終わったあと、自身のテーマ「和解の意義と効用」を研究するため、ケープタウンからヨハネスブルグに飛び、アパルトヘイト博物館を見学。その後プレトリアに向かい、現在は司法省の一部となっている真実和解委員会の局長と、大学で紛争後における赦しの効用を研究されている教授にインタビューを行った。どちらも真実和解委員会の設立当初から活動に関わられた方々である。日本から来た私を快く受け入れてくださり、紙面上では得られない視点を得られたのは非常に大きなことであった。

現地調査を通じて、私は和解の意義を再確認できた。すなわち和解は「被害者と加害者の両方に心の傷を癒すきっかけを与え、将来の安定した基盤を与えてくれるもの」として重要であった。政治的に必要な行為であったとしても、そこにいるのは傷つけた人と、傷つけられた人に変わりはないのである。和解に欠かせないのは「会話」であり、「相手を理解すること」であった。しかしそれは強制されるものでは

仲良くなった語学学校の友達と

ライオンズヘッドの頂上で

From the Faculty of Law 法学部だより

すてきな出会い

法学部事務室
小栗（おぐり） 忠（ただし）

２０１８年も6月から7月末にかけて、全国各所で父母懇談会を開催いたしましたが、私自身は6月10日に行われた沖縄県の父母懇談会へ伺いました。

当日、懇親会の席であるご父母と話をしていたところ、ご子息（兄）がすでに本学を卒業され、現在はもう一人のご子息（弟）が在学中とのことでした。話を続けていると、卒業生のご子息は実は私がよく存じ上げている方で、それがわかった瞬間の驚きと感動は生涯忘れることができません。ご父母から当時の苦労話や葛藤などを伺い、私も涙が出そうになりましたが、現在は社会人として充実した日々を送られていると聞き、非常にうれしく思いました。このようなすてきな出会いがあることが、年に一度の父母懇談会の醍醐味でもあります。来年もご父母の皆さまとお目にかかれることを楽しみにしております。

さて、本稿をお読みいただいている9月上旬は、春学期（前期）の成績発表の時期です。1年生のご父母は、初めての成績をドキドキした気持ちで確認されることでしょうし、就職を控えた4年生のご父母は卒業に向けて残りの単位数が気になることと思います。私の学生時代は、成績発表は年に1回。しかも紙での配付でしたので、都合が悪いときは親に見せなかったこともありますが、現在はC plus（ポータルサイト）でご父母の皆さまにもご覧いただけますのでご安心ください。C plusのIDとパスワードがわからない場合には、遠慮なく学部事務室までお問い合わせください。

夏休み中で帰省されているご子女もおられると思いますので、成績発表をきっかけに、大学での生活や学修のこと、普段の様子などについてお話しいただければと思います。何かお困りのことや気になることがありましたら、ぜひ学部事務室へご相談ください。

ない。大切なのは、紛争後の人々が自身の問題に向き合う時間を作ること。それをサポートしてあげられる存在が誰であるか、であろう。敵であった相手が実は自分の心を癒す存在になりうるのである。両者が紛争中に失った自身のアイデンティティを回復し、同じ社会へ戻ってこられるよう、そして将来へ視点を向けられるような手助けが紛争後の社会に必要とされるのだ。

未来へ

紛争とは成長のきっかけである。その際どのようにそれに向き合うかが重要となる。それは子どもであろうと大人であろうと変わらない。情報化、経済発展が進むなか、多大な時間とエネルギーがかかるこうした紛争解決のプロセスは億劫に思えるかもしれない。しかし、やはり私は向き合う時間の大切さを広めていきたい。自身のアイデンティティはそうやって形作られるし、解決した経験が次へと歩みを進めさせてくれるからだ。

今回の経験は間違いなく実務家あるいは研究者として、和解の可能性を広げていくという自身の夢において貴重なものであった。このような機会を与えてくれた関係者皆さまに心から感謝申し上げたい。

インタビュー先で。局長のモクシャネさん（右）と秘書のタペロさん（左）